

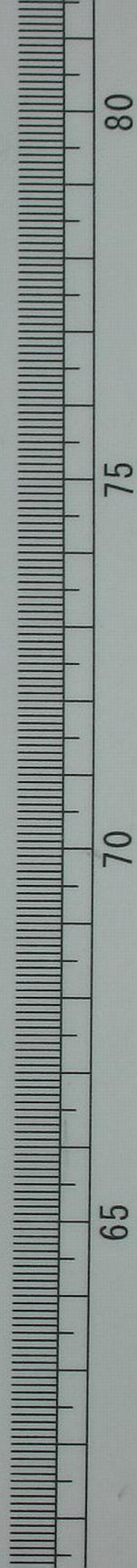


俗通

渡邊義方編輯  
日本小史

第三編

下



65

70

75

80



A 557  
6

俗通 日本小史三編之下

東京

深崎延房檢閲

渡邊文京操觚

明月將不照んとまろや 嬋雲忽まちあま 戎掩ひ花華  
 爛熳久くくゞ 狂風来つくとれを散ち 嬋雲心なる  
 一あまぞ 狂風情なるをふり毛ろく 冷盛んあるそのの  
 必ぶ衰へ満れバ欠る 世運変遷道理ある 哉頼朝の陽  
 一平氏と討と唱へるその身ハ八州の外と征せし矢  
 石と犯して平軍と苦戦せしあま 僅に四五度義仲ハ

日本小史 三編下

48-8437



あまふ反し下たが義旗と翻してより数度の苦戦も  
國家の爲め身と犠牲と大敵と西の海へ逐退け京  
師と守護せし功勞莫大さう頼朝陰に妬忌て君  
父の仇たる平氏と措かぬ忽ち同宗の義を忘れて枝  
葉と枯を無謀の戦端開く緒口へ鼓判官かの平知  
康が撃てへ響くの譬も洩まは義仲鈍くも頼朝が  
巧みの畏し掛らして一朝の怒りもその身と忘れ多  
年の戦功地は墮しつゝ遂に朝敵の汚名を受け粟  
津の原の露と消えし思慮淺ましき限りふとそ

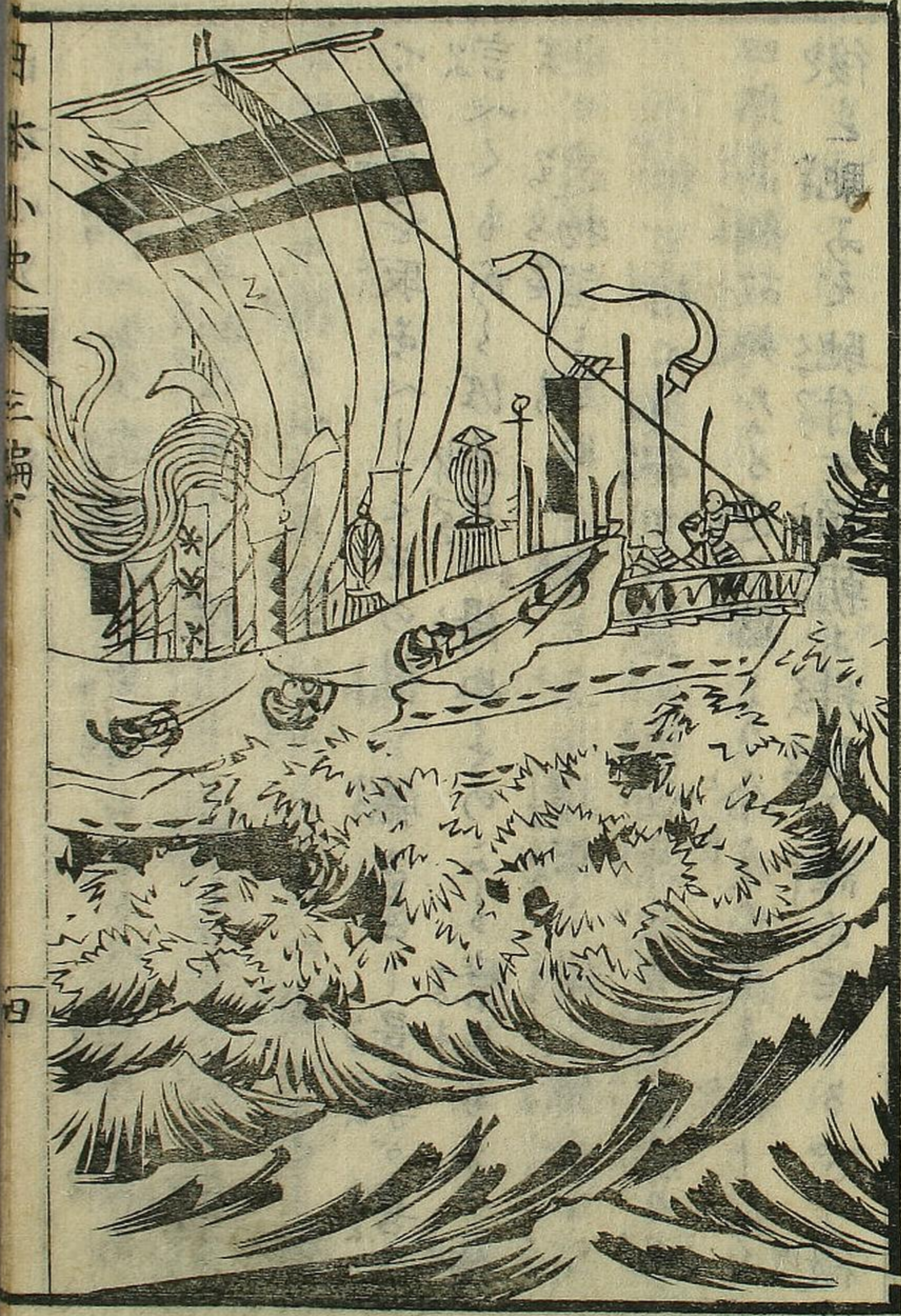
問話休題義仲へ怒りふ任まる鋒尖鋭とく頼も士卒  
を駈立く四方の門より込入りて頓て宮殿に火を放  
ち知康を搜し索むれども得ず義仲遺憾やうう  
なれまゝ恐も多くと法皇と摂政の第に帝と閑院に  
移しまゝせし知康等の官爵と削り自り院廐別當  
とあるなど自狂狼藉至らざるなく嗚呼ある者よと  
頼朝へ鎌倉に在りて之を聞き最早撃べき時機来を  
りと度々使者を京師に遣へし法皇の震襟を慰さめ  
只管人望を得まく欲を京師の士民も稍義仲が狂暴



と厭いとひ頻しばしば頼朝よしかねの風采ふうさいと慕こぞふあぞ去程さつじやうふその年としも  
 暮よるて翌あしたとバ元曆げんりき元年げんねん正月しょうげつ頼朝よしかね乃すなはち八州はつしゆうの將士しやうしと檄げき  
 と傳つたへく西義仲さいぎちゆうと討うむ幾程いくじやうもみくして徵兵ちゆうへい集あま  
 る者もの六万餘騎よきよき二弟ふたに範頼のりたか義経よしかねと兩大將りやうたいしやうと一ひと因よて軍ぐん  
 令まと出でして曰いく木曾勢きそくぜいの必かならば宇治河うぢがは於あて我兵わがへい  
 と防まぐべし依よりて各自おのづか駿馬せんばと準備じゆんびし騎渡きわたりりて戦功せんこう  
 發は勵げんむべしとぞ令まりる頼朝よしかね秘藏ひさうする二匹ふたひきの駿馬せんば  
 り磨墨池ますみき月つきとり何なんと劣あらぬ千里せんり一飛いつぱい海内かい内無雙むさう  
 の駿足せんそくもろ寵臣ちゆうしん梶原平三景時かぢのらへいさんけいとき一子いっし源太景季げんたいけいせきとる

んりくるい年とし若わかたれど智ちあり勇ゆうあり適晴あぢはる微妙びまうき壯さう  
 士しをれを頼朝よしかね寵愛ちゆうあい殊ことは深く近臣きんしんの列りは加かりて在あ  
 りしが今度いまの軍ぐんに従したがひる偉功ゐこうと奏そうせんと欲ほふが  
 故ゆゑは聽きて君前きみまへみ伺うかがひてかの池月いけつきと賜たまはるる宇治うぢ  
 河がの先陣せんじんの嗚呼あかがましる候まらんとやいふ餘人よじんは  
 讓やるべき仰おほぎ願ねがふべ池月いけつきと徵臣めいしんは下くだし賜たまりて  
 と只管ひたすら請こて止とまらぬみぞ頼朝よしかねも景季けいせきが勇ゆうなる請こと拒こ  
 むよ由よしなく汝なんぢが願ねがひのさるあともなき若もし範頼のりたか義よ  
 経よ等ら戦たたかひ敗まる事ことはとば吾親わがせみら後陣ごじんに進すすむ俱ともに戦たたか





田原小次郎



平家の一族華  
 と捨て安徳  
 洛と奉と西  
 帝と奉と西  
 海子走る

田原小次郎 三巻下



せんと思ひあり其時吾が乗馬とせむの池月の外あ  
 るにあらざ加之あらざ諸將士が我もくと乞ふ者多  
 う至ニツの障りありて池月をうりの與へざり依  
 て磨墨と取まべしとその請と聽さざり景季が喜ぶ  
 言べくもあらば池月の得ぬものう磨墨もまじ稀  
 世の逸物望と足ぬと勇と立ち諸軍と俱に鎌倉を突  
 一京師と指て進發せり翌日近江源氏の嫡流佐々木  
 四郎高綱故郷なる近江路より今度の徴に應トツ  
 後馳みぞ馳付て頼朝に拜謁し謹んで云るやう微

臣今度の軍に従ぐひ一度戦ひの場へ臨まば生て再  
 たひ見参し入らんあと思ひも寄らば適に一たび君  
 の尊顔と拜しおん別を報告て行んと欲し直ち小京  
 よ入らざりて馳せむと三日三夜只今到着仕つり  
 ぬ微臣たゞ一馬つるのみ馳通し不馳しゆ名甚く疲  
 きて戦争の役し立べくも候を願へく君が御衆  
 馬磨墨池月のうち一頭と賜るやう偏し願ひ奉  
 つろと思ひ入るを請たりける頼朝當惑の眉を頻り  
 今よ始めぬ汝が忠節誠詞し現をれく感ぜらるし尚餘



里なり今一足迅くんを汝が請と免よんまよ奈何よ  
 せん磨墨へ源太景季不取せ池月へまよ吾が後日  
 出陣の乗馬よ充る一頭のと悪く聞そ高綱と慰  
 さめたまふを耳ふも掛を憚りる事まづ斯り  
 四郎高綱へ君をも兼て知らし如く不肖あれども  
 源氏の末流梶原どの勢ひは属き平は叛き源へ歸き首  
 巖両端常らぬ二股武士とい少く違へりさると何  
 ぞや磨墨と景季よ賜ちりて宇治の先登と命どた  
 まひ今よの四郎高綱が同ト願ひ汝が聴しあはへ一

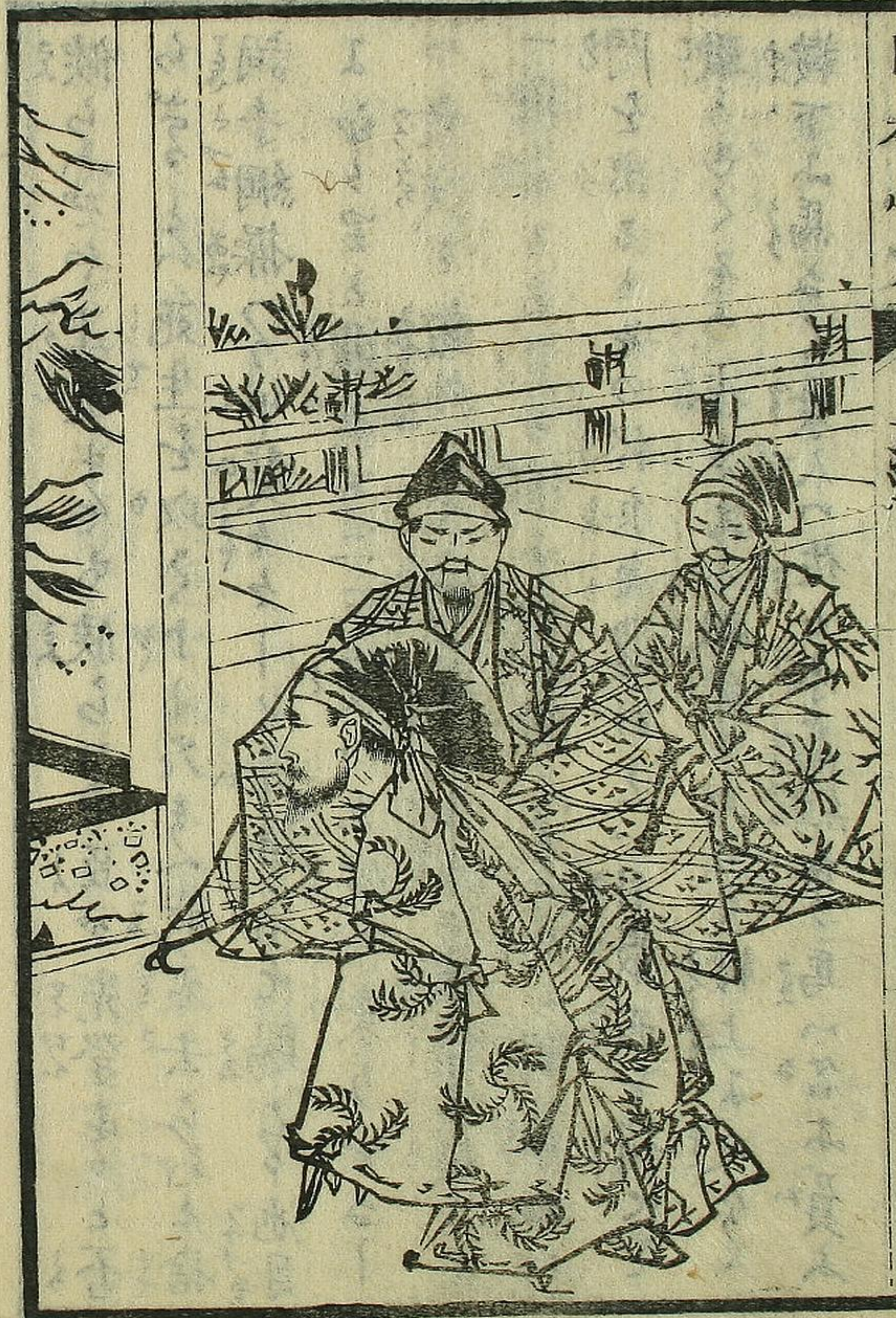
切以てその意と得を勇士の功へ馬よ在り馬あは為  
 取もも足らぬかの景季よ先陣の功を奪へは何面  
 目よ嗚呼くとして戦をん命よ換えて高綱が切る  
 る願ひ汝が聴しなくを戦うひよ臨むまでもな一是  
 りて割腹仕らんと啣言がましく歎き請ひ小刀やと  
 ら搔取りて既不斯りと見えたる面色死と決めたる  
 高綱が一方あはぬ真心と聞あはるぐ頼朝へ感歎  
 せんと回数暫時待ねと押し止め請よ任して池月と高  
 綱汝よ得させんを去れども曩よ景季が乞と聴さぬ



秘藏の逸物磨墨は優るとも劣りへせトと思ふる  
 景季必ら我と汝と怨て事を起さも知まばそ成  
 よく防々ハ汝が才カ心得たる々と宣示を高綱聞て  
 雀躍る一是ハ喜をき思命る其儀ハ逐一心得侍  
 多ぬ斯申さば大言ハ似たれども微臣宇治河の上流  
 居りその浅深と知りたる上名馬ハ跨ぐる宇治の  
 先登やたの餘人ハ譲るべき高綱未だ戦を乞へ死  
 せしと聞たまは先登と他人ハ踰されハなり未だ  
 死せざして戦ふと聞たまは先登ハ則ち高綱もて

候らふぞや注進も候らハ臣が先登まると否  
 らざるとの死生を以てト一たまへ我君去らばと捨  
 詞手綱操つ甲斐々々しく牽きゆて賜る池月  
 二ゆら星と飛乗り二三度四五度輪乗りとさし  
 つ乗試と鑑外して上と敬ふ馬上の禮讓威儀ハく  
 一鞭當ると見る間ハ兩拍蹴入きて只一騎幕府の  
 門を出るとその後兵毎つけと一目散西と指てぞ  
 駛りゆくその疾きと颯風のおとく鞍上よ人なく  
 鞍下ふ馬なく乗人の佐々木高綱多り馬ハ名ふ負ふ





田林心苑

五



千里の駿足忽ち総軍の陣取たる浮島原まで乗  
付たり此時大将範頼義経の將士を分ちて二隊とな  
し暫くあの浮島原に滞陣して後を馳し馳加えろ  
味方の將士を待合せ且十分英気を養ひ全軍を憇ふ  
て此に在り梶原源太景季の他の群馬を視るところ  
已に此回拜受したるかの磨墨も超る者ありやれ  
を宇治河の先登り適晴大功を顯せし敵味方泡  
と吹せ眠り覚め一兵と心より自負し磨墨と  
小高き丘に牽上せ衆人あはれと見ようしと言えぬ

をうらの誇顔と見る人密に嘲り笑ひしきし景  
季が寵を誇りて我一人傍若無人なる拳動る嗚呼  
かましやと叫くや或は彼が名馬と得たるを羨し  
嫉むも多うろろろ恚る折ろろ一声高く嘶き響く小  
人々の誰が馬なるか知らざれど彼の正しく我君が  
第一の秘藏の逸物池月の声に疑ひふし我君出馬  
ししやせしや或は誰が拜受せしやと詞未だ畢らぬ  
うち高綱の從僕何某池月と牽いし梶原の陣し  
る丘の下と過るを見て景季急よ声と掛け如何ふ



夫ある駿足の何人が乗馬あるやと問われ従僕さ  
 ん候らふ是はあまは只今近江より着陣ありたる佐々  
 木四郎高綱の乗馬は候らふいと聞ゆる景季大い  
 は愠り满面忽ち朱旗沃ぎ鬢髪逆立ち目眦烈  
 けアナ怒めしきりる景季が初め池月とと請ひし  
 とた君更し聞入るとたまふ高綱おとたふ見換え  
 らしし返まぐも遺憾は堪お今死するを不忠  
 奇れど弓矢の意地を折るあは難し好々我高綱  
 と死と決し此所にて死するを本意あり面  
 白

うらぬ戦争ふ命を捨るあはとると思ひ決りて倒る  
 ふ猶豫ふ気色あり雄が怒るも流石道理なる哉  
 刀と握り拳を固め只下撃と気は張弓心を矢竹  
 と迅るを我と鎮めて高綱が来る候あそいとま  
 て在り高綱を弔くも夫と察し君が垂示は是ありと  
 心は點頭く勇士の膽畧騒がぎやうて近づくと景  
 季ヤ、と呼止め是は珍しや四郎との一別以来恙  
 あらや足下が乗馬の池月へ這回君より賜をう  
 と睨と詰り身構へるし事宜しよりあは手へ見せ





トと堀込む様子よ高綱の片頬よ莞爾と笑ふと  
舎と問きて今更面目ま一何と云包まん高綱の良  
馬をたんと患ふるあくと久し依て君が厩よ就く一  
馬と借得んとい思ひうと磨墨の既よ足下よ賜  
たり池月の賜をうとと聞き日頃君の寵愛ふりた  
足下よまゝと聴されぬと此高綱が請はると如何に  
う聴さる理ゆらんや去迎君が大事の戦争期ふ後  
はまゝ如何よせん小事と顧るふ違ゆらぬを竊  
と出して乗去りた功と立て罪と贖たふ此高綱が

一時の権策後日君の責問ゆを足下宜しく我為  
よ罪と詫と呉よと君の名義と汚まるとま  
く朋友の交誼を欠ぬやう忠あり智ある高綱よ欺  
うと知らざれを景季聞て怒り成納めかくと  
知らぬを君と怨と足下と憎と一我淺慮吾もかく  
あをまんとうと一ふ竊まぬあとの悔一さとと解る  
も迅き喜怒両情果へ笑ふといと親しく両雄俱よ  
義経が麾下よ属して西の方宇治を指てぞ向い  
るる範頼と勢多より進と總勢おとそ六万餘騎

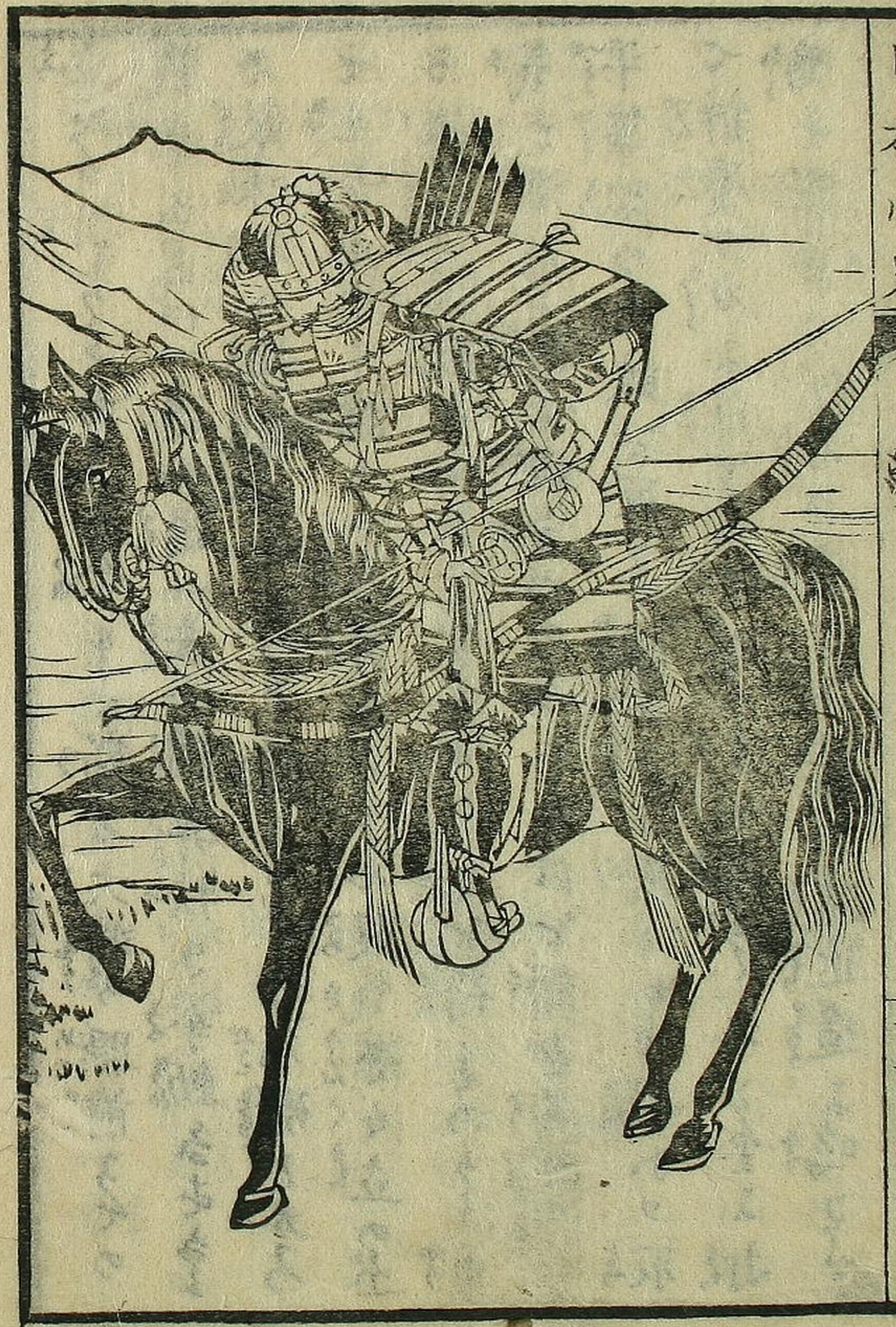
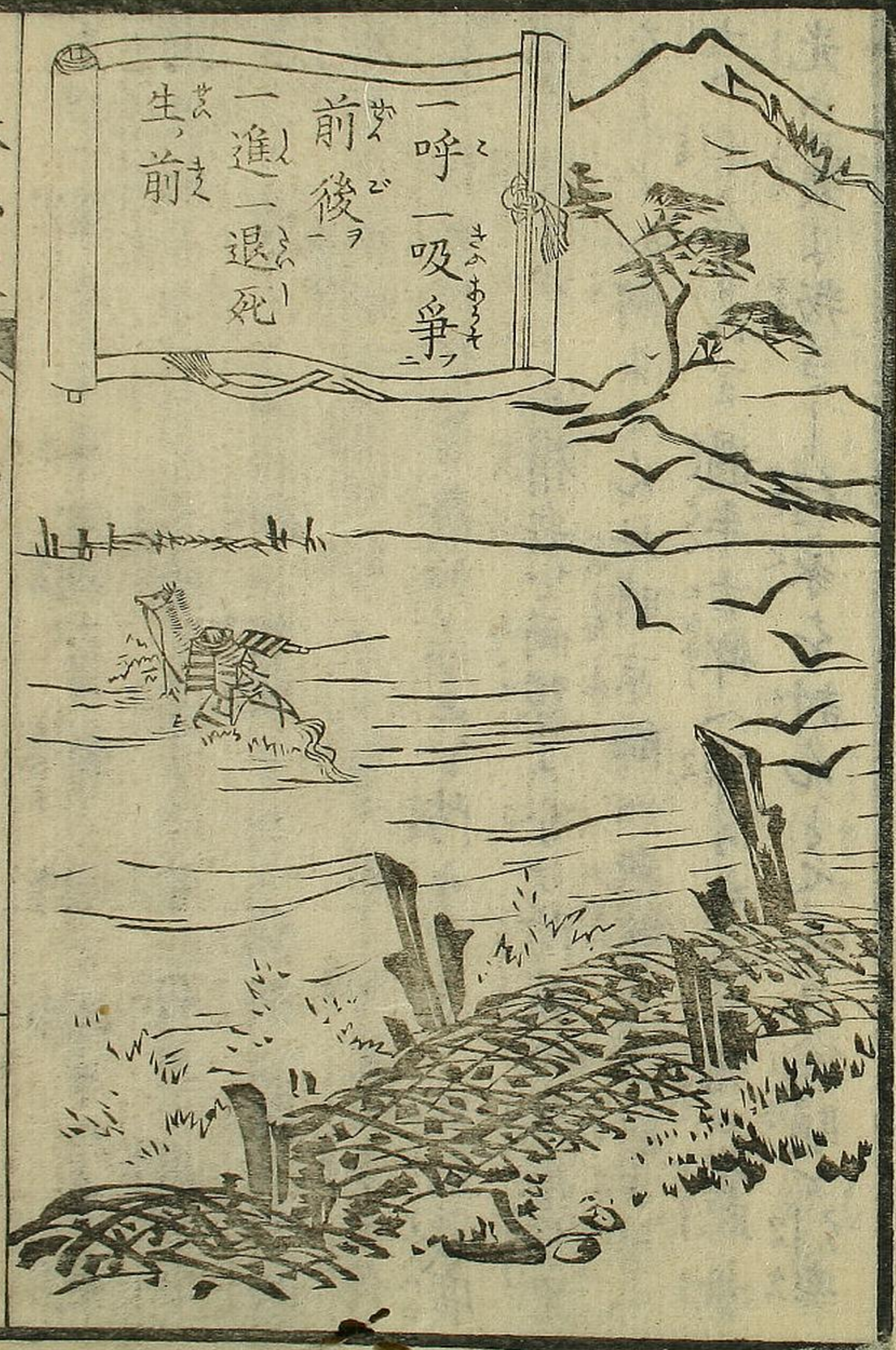


時ときは元暦元年正月二十日義経が總軍二万五千進  
 んで宇治河の東岸に至りて火を放ちて人家を焼  
 き荒茫なる原野とまゝして陳と布き高さ數十丈の  
 櫓を立て大將義経端然と櫓の上は座と占めて右手  
 の方より武藏坊辨慶前より功名帳と扣へ筆硯と具へ  
 て祐筆の任は在り左手より脇股の勇士二三名居流  
 れて戦争の模様と実檢して以て鎌倉に報せんと  
 是現は月覺した曠の勝負古今未曾有の戦争なれ  
 ば我大功と立んものと勇將猛卒さあれたる勇と

立たる折ありあるよ今も斯る大將が眼前よその  
 戦争あり一進一退一去一就鼻怯き拳動なきまき  
 る敵味方の胡慮玉とあつと碎くるも毛礫とたろ  
 て生長んやと誰り一人勇生ざらん殺氣凜々立の  
 る旗色天は朝まるをう空そが軍令と待ものう勇  
 気充満たる故は騒立つのみなきはと聞か義経乃ち  
 平等院の太鼓を取りて櫓の上は釣しめた探おつ取  
 て辨慶が力に任せく張たる皮も破るをうをよ打  
 鳴り響きよ宇治の流はふ落ち遠近遙は鳴りよ



日本小史 三編



日本小史 三編

十一



と一軍とて耳と側にて暫く鳴と鎮めたる是  
時義経令して曰く水練と善まる者ハ泗ぎて前ガ岸  
に上るる一弓隊ハ敵の断墮したる橋桁に縁りて敵  
と防ぎ我泗ぐ者と射さしむるあと勿と令と傳  
ふる迅速の軍畧義仲あまんと防がんとして延尉義廣  
四郎兼平以下の精兵と兩隊に分け防戦の準備嚴重  
なりれど如何とせん此時京師ハ無勢なり躬方の武  
士の暇なきに至る過半古郷へ歸らむらり樋口次郎兼  
光ハ曩も叛きし行家を討んとて五百餘騎を引率

して河内の國へ赴きしうへ義仲手兵千騎は過ぐる  
れども名代の北国武者一以て千ふ當らざるるく左  
右たぐハ擊敗せば去程は東軍ハ令と聞より泗ぐ  
者ハ我もくと鎧と脱して太刀と脊に素肌武者漲  
ぎり流るる河水に身と跳らして飛入りく水の底に  
幾條と多く敵の張たる掛繩と刀と以て断切つ水と  
潜りて働るを俱に助る坂東勇士平山武者所季  
重茂谷右馬允重助熊谷次郎直実等橋架と縁ふ  
て攀上りさし詰り詰り射と放つ兩軍の矢ハ雨



のおとく面を向けべきやうもろろをり競戦稍久く勝負も未だ見えざる折々馬は鞭うち流しと渉り頻り進む二人の騎馬武者互ひ先と争ひつ後れ先だつ黒白の馬の毛色は是どお先ある者へ源太景季後者者へ四郎高綱真魁けの功名を孰とあるうと見てあるうち高綱後より声高く源太景季止まり候らん足下が乗たる馬の腹帯甚く緩く危しく弱たまふる流さしたまふると呼止らして景季へ應と答へも忙しき進退馬を駐めく

腹帯と約めろふ其間高綱得たりと馬を進め疾くも景季と乗超て彼方の岸よ上ると見え一が天地の響く大音揚げ敵も味方も聞ふり東軍の先鋒佐々木四郎源高綱去の宇治河の先登たり後日功と争ふ勿れと呼らりく木曾勢の群る中へ斬入りたり後より踵く景季も同く岸よ飛上り當るふ任して難立る櫓の上より小手を翳し遙よあ戦争と瞬きもせで見詰めて居たる大將義経が指揮し依り辨慶則ち筆と上げ第一先登佐々木四郎高綱若

田林小史 三編下



二先登梶原源太景季と功名帳に記されて後世の美談に残るあれ宇治河の先登あり第三番へ畠山重忠手勢百騎と従へて継いで渡る所渡さすと敵將根井行親が漂弗圖と射て放つ睨ひへさし違ひねど重忠もまゝ眼迅く扱手も見せし飛ひ来るその矢と右の方へ切拂ふ透もろしせし飛来る二の矢は騎たる馬と射斃されその身も水に溺れし四五反りし流されしが武勇抜群の次郎重忠疾くも水に潜り扱け浮り上りや忽ち岸に上りしと跳り立ち刀と

揮つて斬るひけ右往左往は暴廻る獅子奮進の勢ひ鋭とく勇将の下は弱卒なく火花を散る奮撃突戦木曾勢あまひ辟易して色めた渡ると見るより軍機は迅速き大将義経疾や進めと全軍と一度は河へ騎入るに渡さんとする程は流はも為し堰るをうを木曾勢弱きふろし移とも寡へ衆は敵にぞく少選防き戦ふものゝ不慮の合戦その機と失るひ謀畧更は合期せし加之あるむ勢多口もろり破れて範頼の大軍横合よりして撃て蒐まば果敢なく京

日本書紀 三編下

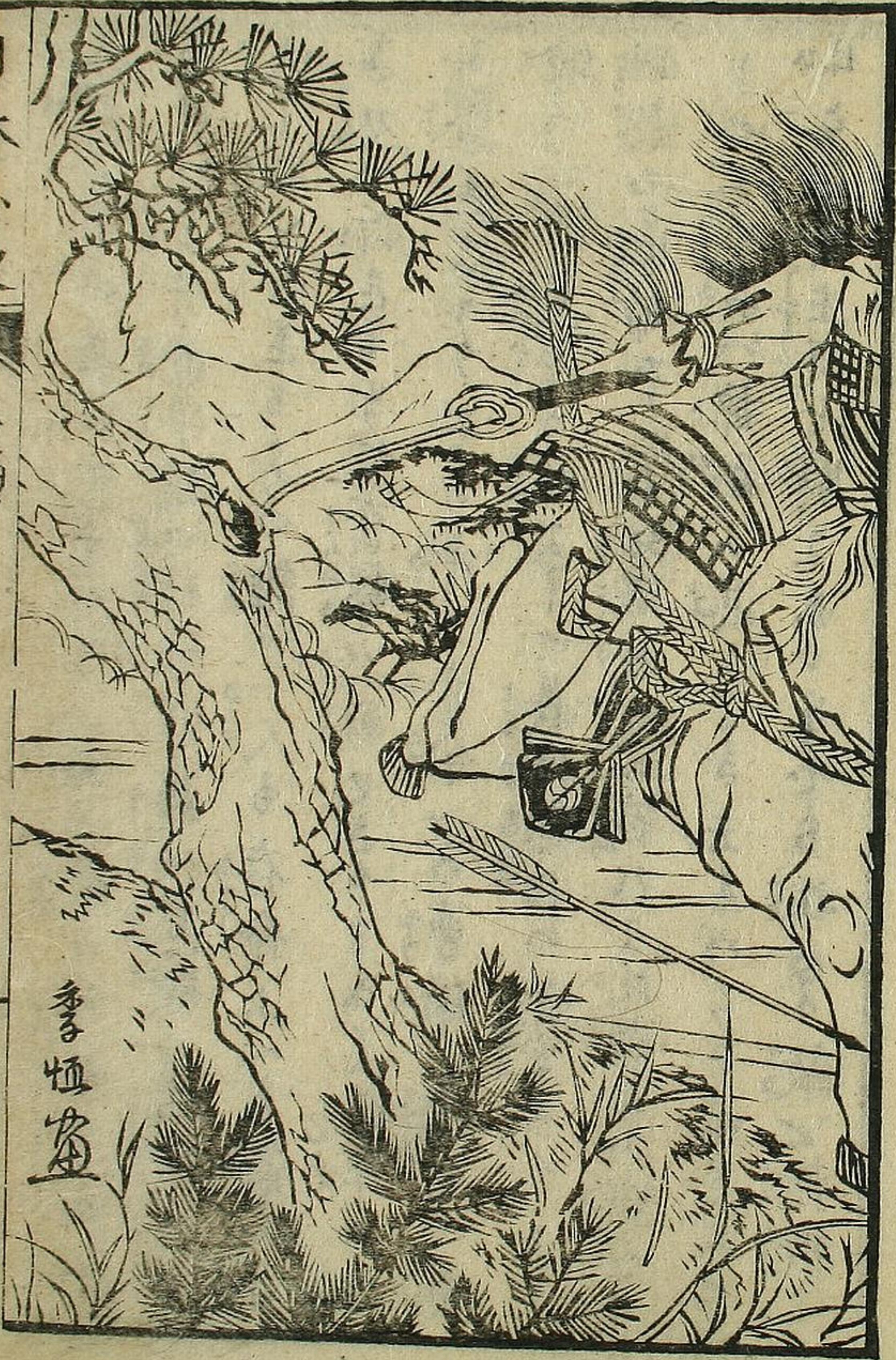
十七



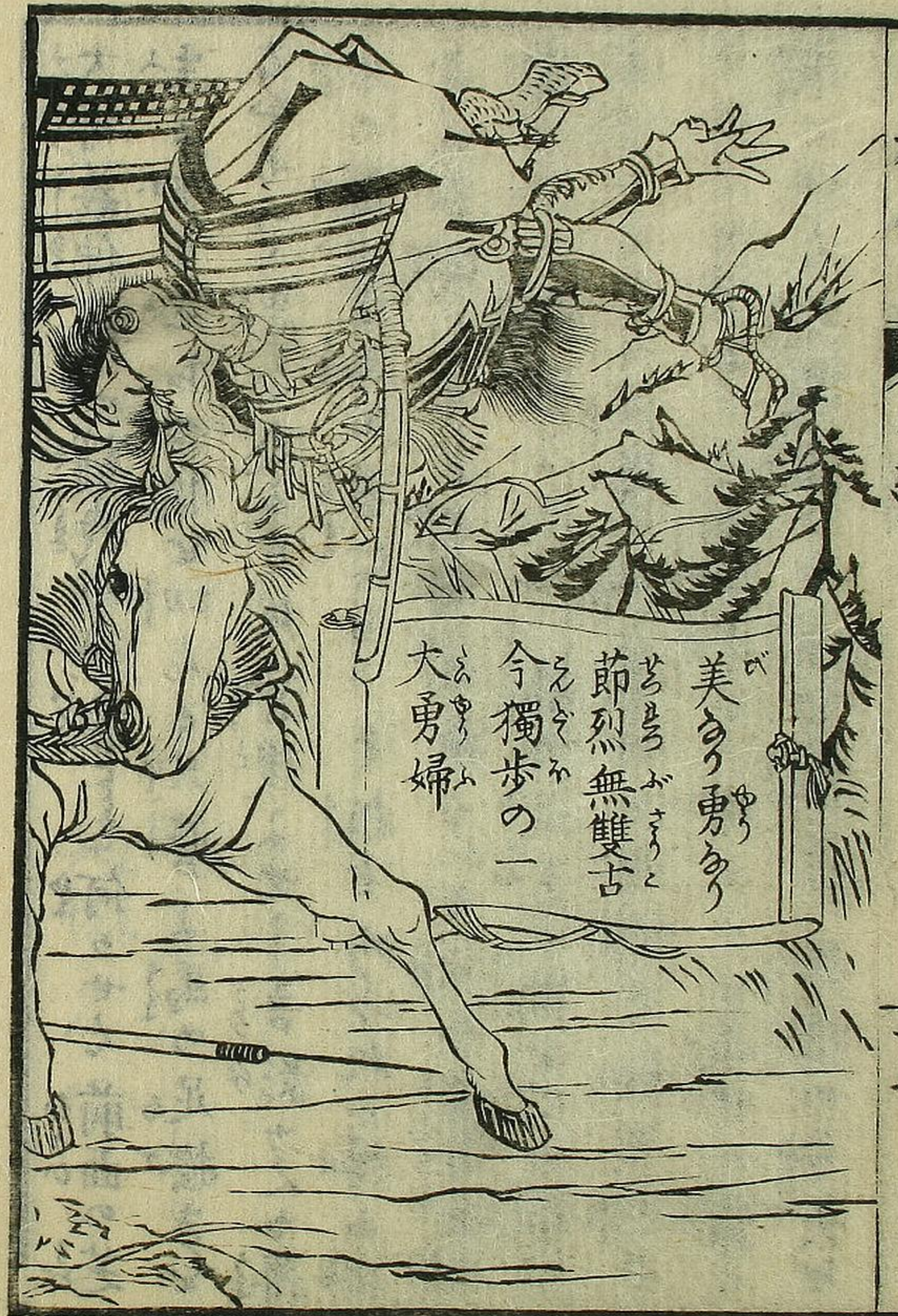
洛と落されつ挟さみろ西海へ逃奔らんと思ひて  
 法皇の宮殿さへ早義経が軍勢撃入り交りて仙院と  
 守護しまわらせ白旗天と掩ひ大軍前後より迫り来て  
 進退既よ谷まうら義仲主従僅よ七騎且戦ひ且走  
 ども越路とよして行もあき脱とかな田の春の雁列  
 を乱して發と立つ羽音よ信と見るとせを早此首  
 彼首よ充満たる敵よりよとの栗津ある森のやと  
 来りて頃瀬田の夕日よ凍釋る残んの雪の飛  
 花落葉後と先なる兼平等へ此後よて隔てらる

大将義仲たが一騎我のみ生とも何らせん前面の芝  
 生よ下り立ちて腹を切んと只管よ馬の足搔きと  
 ちやめつ思ひ入る日紙背後よせ一吾影さるも薄  
 氷の深田よ馬と乗にらりと拍どらめれと得由出  
 むをな便なりと夕間暮見うくる甲の星月夜何  
 處よりろ飛来よらん一筋の流矢よ額と頂へ鉄四  
 五寸うらから深瘡よ小雲時も得堪を鞍紙抱き  
 て固いたるまう三十一一年と一期とて栗津の露と  
 消てゆと可惜盛りの花と散せし無情の弓矢を





季恒女



美あり勇あり  
 節烈無雙古  
 今獨歩の一  
 大勇婦

田村小房

十七



是非ふられ義仲撃退たすひぬと敵の軍兵言動揺  
めけべ今井兼平樋口行親等義仲恩顧の老黨義  
伏し耻と知するもの誰一人も存命ふべき箭の尽  
き刀の折るまで奮撃突戦せざるもなぐ乱軍の中  
に撃とよがりその中よ當今一の勇婦と聞え一鞆  
繪の四郎兼平が妹よして義仲朝臣の側室ありさる  
剛敵の勇婦なれを北國数度の戦ひよ比類ある働ら  
してその名は都鄙よ高うまき去とばらそはまの  
日は時主従七騎よあるまでも柱の敵と斬散し

てまはく先へ進み一く義仲あはれ呼らめ義仲  
が最期の軍よ女人よ先鋒をきりたりる言とん  
の朽惜かるべ一獨圍を斬抜て疾々落よと幾遍う  
身の暇を賜われども鞆繪の一步も退ぞうた  
冥途黄泉のかん俱とのと回答をして群立たる  
大軍へ會釋もなぐ突て入り斬拂ふ太刀風よの偃  
ま草も血よ浸されく同ト枕よ五騎三騎撃とぬ  
敵のふのりなり鞆繪が六の日の打扮の紫格子衣  
織着たる直垂よ菊織と繁くして萌黄おどりの



吐甲ちりまは袖そでつけろ大太刀おほがちと佩たき二十四にじゅう差さたる四羽しりやの  
征箭せいやの射遺かづしたると苦高くたかふ背負せおひつ重藤おもとうの弓ゆみふ  
追弦おひびの連銭れんせん葦毛あしげの駿馬しんばふ金覆輪きんぷりんの鞍くらあたる鑑あき  
長なが弛理ゆるりとうち乗のり丈ぢふ餘あまる黒髪くろかみと後のちへさゆと  
うちあゝと天巻あままきを額ひらふ當あて白打出しろうちの笠仰かさのり反さかり着きる  
一ひとさる遠山とほやまの眉丹花まへにげの口唇くちべ美目みめも容貌くわうちも鶉うらたけ  
て亭年まじやねんあゝは二十八にじゅうはち現げんふ未曾有みぞうの勇婦ゆうふうゝ父ちちの  
為ためふ怨うらみを復たがへ夫おとと佐たすけろ仇あだと討うちたる東海とうかいの烈れつ  
女むすめも形名かたちなが妻つまもいのせう之これふまほべきとて頻あひふ

舌しほと揮うふのゝ我われとて一人ひとり抽ひんぞ太刀たちと合あはる者ものハ  
なまれど敵たかふふ之これ目めと注そぎ十重とへ二十重とへ圍こま  
うへ鞆繪とまゑの主もの先途せんどうふ得えろを身みいたる一騎ひとかあり  
ふろねど心こころまほしく焦燥しよくて近ちかづく敵たかを蹄ひづりふかけさせ  
左ひだりふ拂はらひ右みぎふ當ありて無人郷むねんきやうふ入いるおとく又一條またひとぢの  
血路ちぢを開ひき後のちへさんと馳は出るふ誰たれとて之これと逐おふ  
ののる一ひと浩くわる処ところふ遠江州とほゑしゅうの人氏ぢうぢ内田うちだ二郎平らうへい季吉せきち主しゅ  
従したが三騎馬さんかばと飛といて透間すうまもたなく追蒐おひたり鞆繪とまゑの倍まく  
見みゆゑ物もの々々やとりゆい俣まふ轡しんとやとら引返ひきかへし



乗違ふやうふして先進軍兵が鎧の總角無手  
と掴み目上高くさし揚て矢声とかうる人礫は後と  
て進む軍兵が胸骨さへは撃砕られ伏累ありて死で  
り主の内田へあはれ見えて天晴女が勇力あふ然り  
とく我もまゝ阪東の力士あり眼前は二人まで郎黨  
を撃つ阿容くとして為さあともくは後陣に進  
む甲斐源氏一條等も笑はあんやや這奴萬夫不  
當の勇ありとも鬼神ありとも六十人が力あ  
りとも人も許せし季吉が日來の本事何時とる期

まへき目も物見せんと鎧と蹴立て真一文字も寄せ  
つえせ名告まへ名告る軍旅の古実互ひは知りたる  
事なれば太刀も抜るば箭も射掛を寄る組まん  
遣ちうへく馬の尾首を併べ利腕とさして引組どり  
當下内田へ逸るるく鞆繪が黒髪かきし人腰刀を  
抜き出し頸をわんとあはれしを鞆繪へ騷がむ  
うら微笑と逢なれた和主が拳動うふ軍へ敵より  
ものぞ嗚呼ある所為いせどもわれと言ひ拳と握り  
固めて内田が臂と礫と打つうたれと思ふ指と開



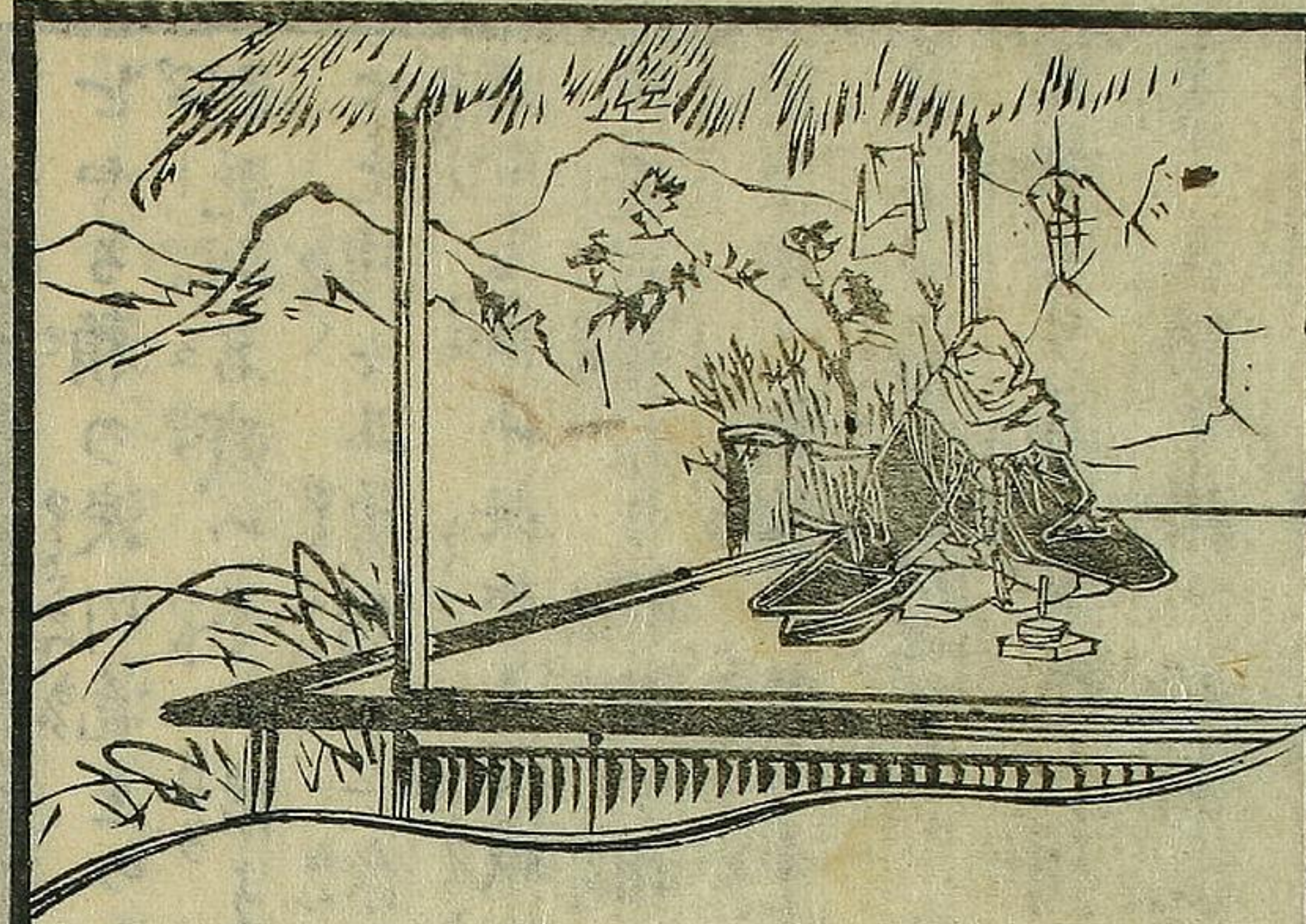
う一又と身理と落せしうを鞆繪の得たうと揮るど  
 き弓手の腕さ伸て兜の真甲より詰て鞍の前輪と  
 逼つけり内兜は手を入して七寸五分の腰刀と見々  
 と抜出し推仰の付て細頸と放突とめ死断りたり季  
 討既に撃ししうを近づく敵兵更はかく雨霰と射掛  
 る箭と斬さうひ斬抜けと辛くして義仲と乱軍の  
 中より搜しあて與ふ俱に死んと請ふ義仲尚も肯せお  
 再三諭して逃れ去しむ今の請ふ詞なく鞆繪の涙  
 か拭ひ泣くとまれど生憎も鎧の袖と濡さし憂

とやる瀬の決川流きの末に何処ぞと天定めたる生  
 別死別名残の尽ぬ後より修羅の街の青鼓追立ちと  
 ても中々ふ勇婦の一念断手として死を決りたる鐵  
 石心も俱ふ此処にて戦死せば君の名義と汚まとも  
 道義責たる説諭の詞も詮方なく右左見顧りく  
 辿りゆく鞆繪が心を千萬無量か測らして哀れよ  
 もまご勇まは事ありり一恁て鞆繪の義仲は別と  
 て漸やく虎口を逃れ惜りぬ命を惜むも君の為と  
 晝の山野に伏し潜る夜も紛きて忍びくみ信濃国へ





観<sup>かん</sup>ぞれを無<sup>む</sup>幻<sup>げん</sup>  
泡<sup>う</sup>未<sup>ま</sup>無<sup>む</sup>久<sup>く</sup>出<sup>で</sup>  
無<sup>む</sup>久<sup>く</sup>帰<sup>かへ</sup>  
る



観<sup>かん</sup>ぞるも  
夢<sup>む</sup>幻<sup>げん</sup>泡<sup>う</sup>未<sup>ま</sup>  
無<sup>む</sup>久<sup>く</sup>遊<sup>あそ</sup>んで  
無<sup>む</sup>を<sup>を</sup>知<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>ず



歸り来て故郷寒く松柏の節操の變ぬ貞女の龜鑑  
此世と思ひまき髪うゑの身みの墨染すみぞめの厄あやとなり越後友松  
の片傍かたはらは偏小へんせうある草菴くさうと結び義仲よしみちが後世安樂ごせあんらくと弔なぐさ  
らひの生涯堅固しんごは行いあひ澄あし念佛三昧佛ぶつ事ことへ以も  
てその身みと終おしとりは箇とは是後こゝろの物語ものがたりりなり去さ  
ををあの軍旅いくさのこと豫よて法皇ほうわうより鎌倉かまくらなる頼朝よりとも  
が許ゆるへ義仲追討よしみちおしごとの院宣いんげんとふし下くださししういひりしは  
して京師きやうし空虚くうきよの折よと窺うかがひ鎌倉かまくらより事ことと起おし猛可まうかし  
討うて上のりしうども頼朝よりともが武運ぶえん微妙めうめうて義仲よしみち釜中かまなかの魚う

とあり亭ていらまて遂つひふ亡なびしうの偕た云々いんげんの院宣いんげんと後  
みぞ下くだし賜たまひしとらや下くだたむ時ときと得とるとらひ土龍つちりゆう  
も昇天しやうてんの位置ゐちと占うめ時ときは遇あひあひを蛟龍かうりゆうも溝壑こうたくの中なか  
は潛ひそまて在あり千里せんりの馬常うまじょうふ在ありまもあはれ紙し知るしるるの  
伯樂はくらくも一ひと菲運ひえん薄命はくめいの才子さいし智人ちじん時ときと得とるとらひ紙し憤ふんり至いた  
世よと慨あき俗ぞく厭いとひかの大隱たいいんの市いちは在ありしう滑くわ替か普ふ洒さ  
落文墨らくぶんぼくは己おのが心こころを遊あそむしめ慷慨かうがい悲憤ひふんの溢あるるく処ところ管かん  
城候じやうかうは訴うへし自みづから悒鬱いふふとやるの徒輩とくばい現時げんじの操觚そうこ者もの  
中ちゆうみもまも無なしとまへしうは編者へんしやが井蛙せいあの僻見へきけん論ろん



説爰小記して義仲が戦死の局と結びかたぬ義仲  
 既して死しなれど東は源氏西は平氏各々天子と挾  
 天下二分割居の強弱五畿七道麻糸の亂とありて  
 世の形勢勝ば忠臣負れを國賊源平末期の戦争に如  
 何ふ編と次で解分べし

通日本小史三編下卷終  
 俗

大坂	前川源七郎	越後三條	青柳止兵衛
同	岡島真七	同	丸屋音八
紀州和歌山	津田源兵衛	同	番場吉次郎
阿州徳島	坂井萬吉	同	村山長太郎
遠州掛川	三原屋甚藏	同	山口萬吉
同	天井金藏	同	竹屋利七
三州豊島	泉屋兼藏	同	浅間屋長七
尾州名古屋	永樂屋東四郎	同	嘉坪屋由右門
同	美濃屋代助	同	目黒宗内
同	中村重兵衛	同	佐藤友吉
甲府山梨	内藤傳右門	同	越中屋與八
同	五明堂正八	同	浅野六平
同	小西屋庄左門	加州	近 八郎右門
		金澤	



同	駿州靜岡	武川半七	同	水屋平八
同	今津美之助	同	同	柚木甚兵衛
同	大和屋利兵衛	同	同	岡本榮作
同	曾比屋平七	同	同	中村嘉兵衛
同	翁屋重兵衛	同	同	西村重兵衛
同	厚木高梨與左門	同	同	齋藤八四郎
同	橫濱弁天通	同	同	近江屋周助
同	元町田澤多一郎	同	同	光白屋清次郎
同	武州熊ヶ谷	同	同	都田誠
同	近江屋平吉	同	同	白根屋藤五郎
同	杉浦平左門	同	同	島屋兼吉
同	下總佐原	同	同	萬屋長五郎
同	好文章正平	同	同	十一屋源助
同	境町高木直二郎	同	同	
同	上總東金北村甚左門	同	同	
		羽前山形		

豆州三島	堺屋又三郎	同	高田為次郎
常州太田	會津屋茂兵衛	同	長谷川虎三郎
野州足利	山木屋金太郎	同	田宮五郎
同	中村宗兵衛	同	萬屋利七
同	今市吉田屋長兵衛	同	本間金之助
上州前橋	橋木屋文次郎	同	角屋直治
同	伊勢崎川木屋平吉	同	能登山五右門
同	高崎龜掛屋卯兵衛	同	佐々木長藏
同	富岡關文堂文次郎	同	三陸屋利兵衛
同	沼田塚田屋佐太郎	同	及川甚七
同	藤岡松野屋貞吉	同	牟岐鉄五郎
同	伊香保小林源二郎	同	壺屋養藏
信州長野	小栢屋喜太郎	同	澤田正助
		盛岡	



Table with two columns of names and their titles. The right column lists names (e.g., 萩原磯左門, 石岡吉十郎) and the left column lists titles and locations (e.g., 同, 八戸, 渡邊善七, 同, 仙臺, 陸奥弘前, 同, 青森, 同, 渡島函館, 北海道小樽, 同, 札幌, 同, 般城南郡, 仙臺國分町, 越中高岡, 越後三條, 同, 岩見巳之助).

版權 明治十四年四月三十日  
免許 同十五年一月出版

編輯人

渡邊義方

大阪府平民

日本橋區濱町三丁目  
壹番地寄留

出版人

辻岡文助

東京府平民

同區橫山町三丁目  
二番地



